［ポスター発表］

主題：老子の『道徳経』の観点から見た生活保障体系の福祉倫理

○　成均館大学　曺在亨

キーワード：生活保障、福祉倫理、福祉体系

１．研究目的

大沢 真理(2007)は福祉・労働市場・政府の役割などを含んだ「生活保障体系」という画期的なパラダイム（概念）を先駆けて主張した。福祉と経済を対立するものと考えていた従来の二分法から抜け出して、経済と福祉を統合して考える一元化した体系を提示しているのである。しかし、彼女の適切な指摘にも関わらず、それを裏付ける倫理的な体系は充分ではないだと考えられる。

生活保障体系を実行するためには、それを裏付ける倫理的な体系も必要なのではないか。そして、その倫理的な体系を元に国民を説得していくという長期的で政治的な過程が非常に重要ではないかと考えられる。

ところで、このような二分法的な考え方はなぜ生まれたのであろうか？　それは近代以降「人間は自然を支配出来る自由を持っている存在」という考え方から生まれた。それでは一元化した考え方を持っていた哲学者はいなかったのか？　それで老子に着目することになった。

本研究では老子の『道徳経』を中心に福祉倫理に関する考察をしていきたい。老子は、人間中心的な周の国の文化に立ち向かい、自然に基づいた生き方を取り戻そうと試みた。そして、それを社会的に拡大出来ると主張した哲学者である。

自然に基づいた生き方とは自然への回帰とは違う。むしろ最近の物理学、神経科学、認知科学、言語学などで重要視されている、現代的で合理的な生き方である。『道徳経』の考察を通して、理性と感情、経済と福祉を対立するものと見ていた従来の問題点を探り、生活保障体系の倫理的体系に関しても新たな発見をしていきたい。

２．研究の視点及び方法　／　3．倫理的配慮

本稿は文献考察による研究のため、特別な研究視点及び倫理的な配慮は含んでいない。

４．研究結果

老子の『道徳経』は理性中心的な思考に対する批判書である(チェ・チンソク、2015)。という観点から『道徳経』を読んでみると「志を捨て、腹を満たせ(道徳経、３章：虚基心，實基腹)」という文はどういう意味であろうか。志を捨てるということは「お金を儲けるため、ダイエットをするため努力しなければならない」というような理性的な判断をしないという意味である。そして腹を満たすということは「体から送る情緒(Emotion)信号こそ真の生の道」という意味である。

身体的の情緒に従うと身体的な健康を得る。それは宇宙というカオスから我々がバラバラにならないようにしてくれる。このような道は動物にも潜んでいるので、まるで卑しいもの、下品なもののように

思いがちである。しかし、これこそ本質である。これとは対照的に、派手で刺激的な食べ物・音楽などは事実上死に至る道である（道徳経、12章：五色令人目盲，五音令人耳聾）。

自分の腹を満たすという情緒反応は一見利己主義的に見えるけど、決してそうではない。自分の空腹を感じ得る者だけが他人の空腹感を理解出来るからだ。従って自分の情緒に対する理解は利他心の条件であり、宇宙を理解するための条件である。情緒が豊富な人は雨が降ったり止んだりするのを見て、我々人間もそのように生きるべきだと悟る（道徳経、23章）。このように利己心は即ち利他心であり、天の道(天道)は即ち人間の道(人道)である。

ところで、このような身体と情緒中心の思想において、人間の理性と個性はどんな意味を持つのであろうか？　現代人は、空腹感や疲労感などを頭で克服する生き方が優越な生き方だと考えている。数学的に解くと「理性＞情緒」である。いかし老子は自分の情緒に充実な者だけが「他人の心を自分の心に受け入れることが出来る（道徳経、４９章：成人無常心，以百姓心爲心）」と述べた。このように「自分の内面から他人の腹を満たしてあげたいという気持が湧き出ること」こそ自然な生き方なのである。我々が生まれた時からお腹が空いたという信号が現れるのと同じように、他人と一緒に泣いたり笑ったりしたい気持が湧き出るのも最初から自然なことである。

このように心から湧き出て目的を達成するために多様な経験と知識を活用する過程こそ自然に基づいた自我実現の過程である。これは価格に因って人々の職業を統制しようとする「需要(Demand)-供給(Supply)理論(Theory)」と対比する。このような個性は情緒に基づいているため、決して宇宙の本性から外れることはない。皆が個性を発揮しているが、誰も社会に害を与えないため、指導者は統治出来ないことがない。これが無爲無不爲の境地である。これを数学的に解くと「情緒＝理性」である。（「情緒＞理性」ではないことに留意せよ。）

しかし、これは決して現実で何もしなくていいという意味ではない。むしろ人為を減らし、無為を増やすための絶え間ない努力が必要であることを意味する。それで老子は指導者こそ欲を減らし、競争を避け、平等に待遇し、相手が不信と不善で立ち向かっても自分は信頼と善良で応対するようにと主張する。

最後に老子の思想の現代性について考えてみよう。北ヨーロッパの社会民主主義（Social Democracy）は１）人間が全てを所有出来るという思考に反発し、２）自由は連帯と平等に基づいているという思考を以て、福祉と経済が統合された国家を作り上げた。彼らの福祉制度はみんなの腹を満たしてくれるので、人々は自由な経済活動をすることが出来る。　指導者が清廉なので不正がなく、信頼があるので問題がない。多くの自由民主主義者は社会民主主義に対して、税率が高いので「（干渉の）大きい政府」と批判する。しかし、貧困度を調べて補助金を支払うような制度こそ、真の意味の「大きい政府」であり、次から次へと問題を作り上げると言わざるを得ない。

５．考察

生活保障体系は、経済と福祉という二分法では正しい福祉政策を実施するのが難しいという考え方に基づいている。その考え方を裏付けられる倫理的な根拠を、老子から見い出すことが出来ると考えられる。利己心と利他心、または自由と平等が同じものであるという発想は、経済と福祉も同じものであるということに繋がるためである。これを元に、生活保障体系だけでなく、経済と福祉を統合するための多様な論議が行われることを期待する。